

第1問 次の文章を読んで後の問い(問1～7)に答えよ。(40点)

飢餓とは、朝ご飯を抜いたらお腹が空いたということではなく、長期間にわたって満足に食べられず、①マンセイ的な栄養不足となり、生存や生活が困難になっている状態を示します。ただ生きているという生命の維持だけでなく、きちんと食べて健康で社会的な活動を行えることも基準になります。最近では、糖分や油などによってカロリーだけは充分(ときには必要以上)に摂取していても、必要な栄養素はバランス良く取れていない「空っぽのカロリー」「隠れた飢餓」も問題になるなど、量だけでなく質も重要視されています。

食べられない人がいるなら、もっと食料を生産して量を増やせばいいかといえば、それは問題とは限りません。じつさい、国連食糧農業機関(FAO)は「地球は問題なく二〇億人を養える」「二九八四年」と報告しているなど、世界に食料はあまるほどあるのです。

映画『ありあまるこちそう』(エルヴィン・ヴァーゲンホーファー監督、二〇〇五年)の中でも、「今の世界経済なら問題なく二〇億人を養える」と言っています。だから世界人口を養えるだけの食料がある世界で食べられなくて命を落とす人がいることは「飢餓は殺人にはならない」と。

すでに一九七〇年代には、スーザン・ジョージによる『なぜ世界の半分が飢えるのか——食糧危機の構造』などの本も出版され、飢餓問題は食料の量だけの問題ではなく、より歴史的・構造的・政治経済的な問題だと、ずいぶん前から認識されていました。

【中略】

段階を追ってみましょう。

(1) 植民地として資源も人もごっそり奪われた

欧州諸国による数百年にわたる植民地政策を、ジグレルは「『国下口ボウ』と表現しています。アフリカには高度な文明も存在し、農民や牧畜民たちは、自分の家族が食べるモノと土地の権力者に年貢として納めるための食料を生産していました。そこへ欧州人が武力を持って乗り込んできて、多くの土地を奪い、多くの人びとを奴隷として「輸出」し、残った人びとも強制労働を課して、棉花や茶、カカオなど、輸出向けの商品作物を大量生産させました。つまり、「南」の農業は、現地の人が食べモノを生産する営みから、「北」の産業革命や経済発展を支えるための、工業の原材料を生産する農業へと変えられたのです。

【中略】

一九六〇年代に多くの植民地は独立していきしましたが、元宗主国が元植民地に経済的・社会的に大きな影響を与え続けた「新植民地主義」が続き、植民地時代に輸出向けに作り替えられた途上国の農業もそのまま継続されました。

(2) 第二次世界大戦後には、米国で過剰に生産した小麦や大豆などを「食料援助」として大量輸出した

第二次世界大戦後までに、米国は小麦や大豆を必要以上に生産して輸出できる農業国となりました。

戦後、戦間や空襲でボロボロになった欧州諸国や日本が突然としていた間にも、米国は戦争のために推進した技術や産業を平和利用に転じて、農業生産力をさらに拡張していきしました。米国は直接戦場にならなかったため、その工場や生産インフラは被災を免れ、むしろ軍需のための戦時中にその生産能力を増強していました。

戦時中、爆弾のための窒素や毒ガスを製造していた巨大な生産施設は、戦後、化学肥料や農薬の製造工場と姿を変えました。ジーブや戦車を製造していた重工業は、戦後、トラクターやコンバインを生産し始めました。戦争によって豊富な資金を貯えた米国の銀行は、化学肥料や農機具を購入する資金をよるこんで農民たちに融資しました。さらには、当時は安くて豊富だった石油資源が、農業の近代化を推し進めていきます。

こうして、米国の農業は、より工業化・大規模化され、農薬、化学肥料、農業機械などを投入して特定の商品作物を大量生産する産業へと転じていきました。

やがて、国内での需要以上に生産して、穀物の在庫が溜まってきました。米国政府はこの過剰生産物を、まずは戦場となり②ビヘイしていた欧州諸国に食料援助として放出しました。前章で、第2次フールドレシムとしてみた構図の通りです。

【中略】

「南(途上国)」では、食料援助によって自国の農業で食料を賄う能力をさらに弱められました。生産費より安い価格で輸入された穀物に、途上国の農民たちは太刀打ちできなかったからです。植民地時代から続くプランテーション農業と、食料援助による安価な食料の「ダンピング」によって、地域の食を支えていた途上国の農民たちは困窮していきました。

(3) 食料や農産物だけでなく、今度は農業生産資材も輸出する市場に

やがて、米国の農民たちは農薬や化学肥料、農業機械などを買いそろえて、これらの国内市場が飽和してきました。そこで今度は、米国で農業生産した食料を輸出するだけでなく、農薬、化学肥料、農業機械、種子など農業資材や技術も輸出して海外市場を開拓しようとし始めます。

農業資材や機械を製造していた米国企業は、終戦直後には、米国政府による欧州復興計画(マーシャル・プラン)に便乗して彼らの製品を売り込む市場を欧州に開拓しました。やがて欧州諸国も自分たちの農業生産量を増やし、まもなく欧州でも食料の過剰生産に苦しむようになってきます。

今度はその矛先が「南」の途上国へ向けられました。独立したばかりの元植民地に、「開発」や「技術援助」という言葉を添えて。

(4) 「緑の革命」…工業的農業モデルを途上国に輸出

一九六〇年代に、「高収量」な新開発の種子と、その改良品種を栽培するために必要な生産技術や資材を途上国へ導入した「緑の革命」(Green Revolution)と呼ばれる農業技術革新の動きがありました。小麦、コメ、トウモロコシなどを品種開発し、③一代雑種、かんがい、化学肥料や農薬を④フィユウさせる、工業的農業を途上国へ導入しようとする南北の政府や国際機関や大企業が推進した一大(イ)キャンペーンでした。

「緑の革命」という呼び名は、共産主義が一九六〇年代にアジア、アフリカ、ラテンアメリカの貧困国を巻き込んだ「赤の革命」に対抗したもので、欧米の政府と企業を中心とする「近代化農業モデルの途上国への導入は、⑤共産革命に対する資本主義の防波堤として使われた」といわれています。

「北」が開発した新しい小麦やコメは、背が低く収獲量は多いハイブリッド種子でした(⑥感性的の高収量雑種)。化学肥料を大量に投入しても倒れることなく収獲量を増やすことができ、けれどもその分、病気や害虫に弱いため農薬を必要とし、一代雑種のため種子を毎年購入しなくてはならない品種でした。つまり「緑の革命」が開発した品種は、農薬や化学肥料を多用し、かんがいによる水を多用することで高収量をあげることができた品種だったのです。管理された条件下では収獲量は増えますが、そのために主に「北」の工業が製造した農業資材を多額の金で購入し続けなくてはならない仕組みでした。

この新技術導入は一部では収獲量を増やしたものの、「南」の農業を破壊した面もありました。ひとつには、現地の農民たちが瘦せた土地や厳しい気候でも育つ品種を選んで歴代育ってきた小麦、トウモロコシ、コメなどの在来種を⑦クタクし、現地の生物多様性を九〇%減少させました。もうひとつは、「緑の革命」を実施するためには資本の投入が必要だったため、主にその⑧オンケイを受けたのは資本を持つ中～大規模農家でした。

比較的裕福な農家が生産規模を拡大し技術導入によって収獲量を増加すると、大量の穀物が市場に流入して価格を押し下げ、逆に貧しい小規模農家を破産に追い込み大量の農民を失業させてしまいます。彼らは他の職を求めて都市部に流入したり、より



環境的にもろい森の緑や傾斜地に移住して生き延びるための作物を育てようとしたりしました。

やがて、裕福な農業生産者に「緑の革命」によるハイブリッド種子や化学肥料・農業が行き渡り、「南」でもこれら農業資材の市場が飽和してくると、政府はより貧しい農民たちに融資して小規模農家たちも「緑の革命」の種子や農業資材を購入できるようなしました。収穫量が増えるからと、借金させて種子や農業・化学肥料を購入させたわけです。その資金にも「北」からの融資や政府開発援助金が使われました。有り体に言えば、「北」が「南」にカネを貸して、「北」の商品を「南」の農民たちに買わせ、その利益が「北」の企業に流れる一方、その借金は「南」の農民に残るという構図でした。

④「緑の革命」は穀物の収穫量を増やしたことで世界の人のびとを飢餓から救ったと繰り返し称賛されますが、それは同時に、多数の飢える人びとを生み出しました。表向きには農業生産量を増加して人びとを飢餓から救うといながら、「南」の農民や農地を「北」を中心とする資本主義経済システムに取り込み、主に「北」の大企業が利潤を得ることが本音だったからといえるでしょう。

〔平賀緑「岩波ジュニア新書 九三七 食べ物から学ぶ世界史——人も自然も壊さない経済とは?」による〕

〔注〕 1 第2次フードレジーム——筆者は第2章で、「第2次フードレジーム」について、「第二次世界大戦後に世界の覇権

国となった米国を中心に、一九四七―一九七三年ころに形成されたパターンで、米国における工業的農業で必要以上に大量生産した小麦、大豆、トウモロコシなどの穀物・油糧種子を、「食料援助」も利用しながら日本など敗戦国や途上国に大量に輸出し、食料を外交における戦略的な武器として使いつつ農産物の海外市場を開拓した時代」としている。「油糧種子」とは、ナタネやゴマ、ダイズなど、油をとる原料となる種のこと。

2 かんがい——「灌漑」。農作物の生育に必要な水を、水路を引くなどして供給し、耕作地をうるおすこと。

問1 傍線部①～⑤のカタカナを漢字に改めよ。くずさないでつぎりと書くこと。解答は記述式解答欄④の(1～5)に記せ。

問2 傍線部⑦・⑧について、文中での意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つ選べ。解答番号は⑦が

1、⑧が2。

⑦ ダンピング

- ① 商品を市場に出ないように買い占めること
- ② 値段をつりあげて売り惜しみをすること
- ③ 弱みにつけ込んで低い価格で買いたくこと
- ④ 不当に低い価格で販売すること

⑧ キャンペーン

- ① さまざまな流通機関を利用して物品を販売する活動
- ② 主張や宣伝のために、組織的に広く社会や大衆に訴える活動
- ③ 対立する意見について批判しおとしめる宣伝活動
- ④ 国際的な立場にたって、世界的視野で研究を行う活動

問3 傍線部①「国ドロボウ」とあるが、これは具体的にどのようなことを意味するのか、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は、

3。

① 植民地政策によってアフリカには農民や牧民たちが自分の家族が食べるモノと土地の権力者に年貢として納めるための食料を生産していたこと。

② アフリカの農民から、彼らの家族が食べる食料と土地の権力者に年貢として納めるための食料を根こそぎ奪い取ってしまったこと。

③ 高度な文明が存在したアフリカから、多くの土地を奪い、人々を奴隷として奪い、食料を生産していた農業を輸出向けの商品作物を作る農業に変えてしまったこと。

④ アフリカ諸国が独立しても、「新植民地主義」が続き、植民地時代に輸出向けに作り替えられた途上国の農業もそのまま継続されたこと。

問4 傍線部②「近代的農業モデル」とはどのようなものか、四十文字以内(句読点を含む)で説明せよ。解答は記述式解答欄⑤に記せ。

問5 傍線部③「共産革命に対する資本主義の防波堤」とはどのような意味か、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は、

4。

① 途上国への共産主義の浸透をある程度食い止める同盟

② 途上国への共産主義の浸透を積極的に推し進める宣伝

③ 途上国への共産主義の浸透を完全に阻止する軍事作戦

④ 途上国への共産主義の浸透を食い止めるのに有効な施策

問6 傍線部④「緑の革命」は穀物の収穫量を増やしたことで世界の人のびとを飢餓から救ったと繰り返し称賛されますが、それは同時に、多数の飢える人びとを生み出しました。」とあるが、「緑の革命」が「多数の飢える人びとを生み出し」たのはどのような理由によるものか、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は、

5。

① 大企業が利潤を得るために、種子や農業・化学肥料を購入させて、「南」の農民たちが自分たちの食料を賄う能力を奪ったから。

② 「北」の諸国が、自分たちの農業生産量を増やし、まもなく欧州でも食料の過剰生産に苦しむようになってきたから。

③ 「南」の農民達が他の職を求めて都市部に流入したり、より環境的にもろい森の緑や傾斜地に移住して生き延びるための作物を育てようとしたから。

④ 欧米の政府と企業が共産主義の勢力下にある貧困国については、近代的農業モデルを導入するように働きかけなかったから。

問7 この文章のかっこつきの「北」と「南」はこの文章ではどのような意味で使われているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は、6。

① 「北」は北半球にある、主にヨーロッパ文明に属する国々をさし、「南」は南半球にある、ヨーロッパ以外の文明を持つ国々をさしている。

② 「北」は北半球にある、資本主義が高度に発達した国々をさし、「南」は南半球にある、生物や鉱物など天然資源が豊富な国々をさしている。

③ 「北」は北半球にある、資本主義が高度に発達した国々をさし、「南」は南半球にある、長い間資源や人間や富を奪われてきた国々をさしている。

④ 「北」は北半球にある、融資や援助で他国を支援する国々をさし、「南」は南半球にある、その支援で飢餓から脱出した国々をさしている。